

菊本副院長の漢方問答 その 72

問 「肥満の漢方治療とはどのようなものですか？」②

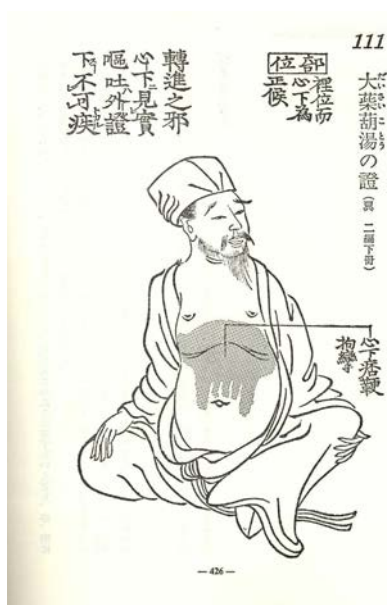
答 肥満の漢方治療について、お話を続けます。表の「固太りタイプ」の三番目、大承気湯(だいじょうきとう)についてお話します。

表 肥満の頻用処方

固太りタイプ	防風通聖散、大柴胡湯、大承気湯
水太りタイプ	防己黄耆湯、越婢加朮湯、九味檳榔湯
瘀血を伴う場合	桃核承気湯、桂枝茯苓丸
気逆・気鬱を伴う場合	柴胡加龍骨牡蠣湯、桃核承気湯、加味逍遙散、抑肝散、半夏厚朴湯

(日本東洋医学会、「漢方医学テキスト」)

大承気湯も、漢方の重要な古典である「傷寒論(しょうかんろん)」と「金匱要略(きんきょうりやく)」に登場します。構成生薬は、大黄(ダイオウ)、枳実(キジツ)、芒硝(ぼうしょう)、厚朴(こうぼく)の四つで、極めて簡明な構成です。大承気湯は、胃腸の気の流れが悪くなり、頑固な便秘があつて、発熱していますが悪寒はなく、汗をかき、ときには、うわ言を言うようになるようなときに使用します。



図は江戸時代に書かれた「腹証奇覽翼(ふくしょうきらんよく)」に掲載されている大承気湯の腹証図です。胸の下部からお臍の上部にかけての、かなり広い範囲に所見があります。気の流れが悪くなったために、胃腸がつまり、熱のために胃腸の中がかわいていることをあらわしています。これを大承気湯で治すわけですが、まずは、構成生薬の「枳実」、これは前回の「大柴胡湯(だいさいこうとう)」でお話した通り、「みぞおち」あたりの「気のかたまり」をとるのが枳実の仕事です。

もう一つ、気の流れを調える生薬として、大承気湯では、「厚朴」が含まれています。厚朴は枳実より上、ノドから胸の上部あたりで、気を「上から下」に流します。大黄と芒硝は、熱をさまし、便秘を治します。大承気湯は、厚朴と枳実が協同して、強力に気を流すのが特徴です。

大承気湯は効果が強烈なお薬です。使用するにあたっては、当然、慎重になるべきであり、残念ながら、当院のせんじ薬としては、用意しておりません。あしからず、ご了承願います。